



儀礼用衣装

トリングット（北西海岸インディアン）

使用年代 20世紀前半

チルカット・ブランケット 横 175cm
縦 129cm

「北緯55度・アラスカ半島の先史文化」について

平成5年度の最初の事業として、4月27日から6月3日まで第6回特別展を開催しました。「北緯55度・アラスカ半島の先史文化」と題し、アラスカ半島の中央部、ベーリング海に面するホットスプリング遺跡の出土資料によってアラスカ半島の先史文化の一端を紹介しました。

このホットスプリング遺跡では、日本の人類学者、考古学者らにより、6回に及ぶ発掘調査がおこなわれました。遺跡は、貝塚を含む大規模な集落跡で、イヌイト、あるいはアリユートの祖先が残したと考えられています。

本特別展は、発掘ののち、整理研究のために調査者が保管している出土遺物と、調査時の写真や図面記録、映像によって構成しました。これは研究代表である北海道大学文学部教授岡田宏明氏、共同研究者である北海道東海大学岡田淳子氏のご好意とご協力によって実現しました。

以下に本特別展の概要について紹介します。

ホットスプリング遺跡を取り巻く環境

アラスカ州は北アメリカの北西端に位置し、面積は152万平方キロメートルと、日本の4倍以上もあり、南北は北緯54度から72度、東西は西経128度から172度までに広がっています。このうち、太平洋に面する地域には、氷河が極めて広い範囲に分布しています。アラスカ半島はこの地域から南西方向に、約800キロメートルの長さで延びていま

す。今回紹介したホットスプリング遺跡のあるポートモラー湾は、半島中央部の、北緯55度付近に位置し、ベーリング海につながっています。海洋の影響を受けるため霧や風雨が常に発生しているところですが、動植物が意外と豊富などころとして知られています。

集落、生業

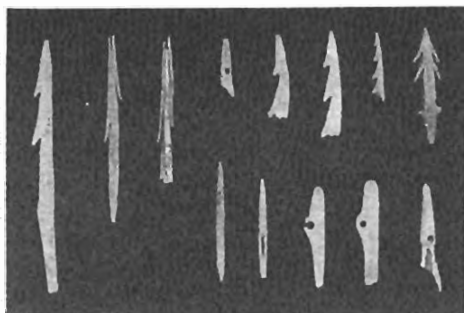
ホットスプリング遺跡の特徴は、6万平方メートルに及ぶ貝塚と、数多くの堅穴住居跡が存在していることです。

人類がもっとも古くこの地に住み着いたのは、今から5,500年くらい前であることが科学的な年代測定で明らかにされています。その後、今から500年前あたりまで生活の痕跡が認められています。つまり5,000年間にもわたって生活の本拠地として利用されてきたのでした。この結果、貝塚は厚いところでは3メートルをこえて堆積しています。

この貝塚からは貝と一緒に海獣や陸獣の骨、鳥の骨が発見されています。獣骨の分析によると、夏に捕獲されるものと冬に捕獲されるものがあることから、人びとが一年を通してこの地に生活をしていたことがわかります。

生業としてとくに顕著なことは、古くから海洋に適応を果していたことでした。その証拠に、骨角や石を素材にした狩猟道具が豊富にみられ、回転式とかえり式の鉋先、骨製でかえりの付いた丸





さまざまな狩猟・漁ろう具の先端

棒状の魚漁用の槍先、組み合わせ式のやす先や釣り針、自然礫を打ち欠いて紐かけをつけた大小の石錘などがあります。また銚先や槍先の先端に植え込むための石鏃、石ナイフは種類も数量も豊富です。

埋葬

貝層や竪穴住居の調査で埋葬人骨が発見されており、精神文化の一端を明らかにするための良好な資料となっています。4,000年前の貝層からは、酸化鉄を含む赤色土や板石、副葬品を伴った埋葬人骨や、人骨の周囲に数個体のイルカの頭骨を巡らせた例などがみられています。このような埋葬は、半島の他の地域に例がなく、注目されるものです。

石鏃などの尖頭具、骨製のクサビなどを副葬品としていました。

日常の道具と装飾品等

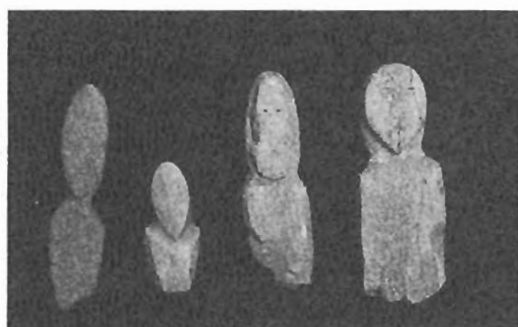
竪穴住居内には石ランプが置かれ、暖房と照明として使用されていました。この石ランプは、時代が新しくなると床面に備え付けて作られた粘土製のランプにとって代わられるようになりました。

このほかに日常の生活用具としては、鳥骨製の縫い針、皮を縫い合わせるための必需品と考えられます。骨製のクサビ、シャベルなどは

土掘りや雪掘り用に使用されたことでしょう。

海獣や陸獣をかたどった骨角や歯牙製の像や下唇に付けるラブレット、さまざまな彫刻が施されたピンなどといった装飾品が数多く発見されています。

展示資料は310点ほどでした。大半の資料は小さいもので、個々が迫力あるものではありません。しかしこれらの資料は、北方の狩猟民が、自然の恵みを巧みに利用しながら厳しい環境に適応して



人物像

きたことを物語るものです。

本特別展では、実物資料以外に映像や写真パネルを多用しました。とくに映像は、発掘調査の様様を記録した8ミリフィルムからビデオテープに変換したものを編集して上映しました。

(学芸課 青柳文吉)

アラスカの先史文化について

講師／北海道大学教授 岡田 宏明 氏

特別展にご協力いただいた北海道大学教授岡田宏明氏を迎えて、5月16日に講演会を開催しました。以下に、講演会の概要を紹介します。

アラスカ先史文化の概要

人類が低緯度地域から北緯60度を越えて、それより北に進出したのはそう古いことではなく、氷河時代の、今から約3万年前と言われている。人類が北方に適應できるようになるためには、寒冷地に住める体質を身に付ける必要があるとともに、住居、衣服などに工夫を加えるなど、文化的な適應が必要であった。

約2万5千年前、ユーラシア全体に人類の居住地域が広がる。その当時、旧大陸と新大陸を隔てるベーリング海峡は干上がって陸地化し、しかも乾燥した草原だった。人は、海を渡らなくとも新大陸に移動できたのだった。そうして新大陸へ移住した人にとって、南へ移動しようとした時に一番の障害になったのは氷河だった。北アメリカ大陸を覆った氷河は、太平洋側と大陸中央から大西洋側にあった。1万2、3千年前頃に、その氷河と氷河の間を通過して、人びとは南に移動して行き、インディアンの祖先となった。

アラスカ西南部の先史文化

この地域の一番古い文化は、1万3千年前頃に現われ、パレオアーケティック文化とよばれている。アジア大陸起源の石器製作技法である細石刃フレイクスの技術を持った文化である。マンモス、ジャコウウシ、カリブーなどの大型獣を狩猟していた。

5,500年前頃、アメリカ型石鏃とよばれる独特な石器を持った文化が現われる。外からの影響を受けず、アメリカ大陸だけで発達した文化で、北方の針葉樹林帯にも広がった。これにやや遅れて現われるのは極北小型石器文化で、アジアから渡った人の文化の影響を強く受けていることが石器などから捉えられる。人びとは内陸と海岸に定着するようになる。のちのエスキモー文化の祖型といわれる。このころ竪穴住居ナドアンの使用が明確になり、そ



れまでは打ち欠いた石器ばかりだったものが、一部磨いた石器も使われるようになる。次はノートン文化とよばれる時代で、紀元前2,500年頃から、かなり定住的な生活が行なわれるようになる。狩猟具が発達し、骨角器がたくさん使われるようになる。暖房や照明になる石ランプや、土器が使用されるようになる。人口の飛躍的な増加があったと見られる。そののち紀元後1,000年頃に現われるチューレ文化は、民族誌にみられるエスキモー文化とはほとんど変わらない内容をもつ文化である。ラブレット（口唇具）が使用され、磨製石器が主体となる。住居の出入り口には、トンネルがつき、今のエスキモー文化の内容が出そろろう。

新大陸への人の移住に関しては諸説あり、誰もが納得できるようなところまではいたっていない。いろいろな仮説モデルが並立している状況といえるだろう。

ポートモラーの発掘

アラスカ西南部の先史文化の一端を明らかにするアラスカ半島、ポートモラー湾に面したホットスプリング遺跡は人類学研究者にとって大変魅力がある。大きな集落跡で、そこには3メートルも堆積している魚骨、海獣骨、陸獣骨が混じる貝塚があった。そして今も、動植物をはじめとする豊かな自然が残されている。

アラスカの歴史の大部分が先史時代といえる。現在そこに暮す人びとからは、発掘品であってもそれがどのような用途に使われていたかなどすぐに聞き出すことができる。そのように、伝統文化に対する豊富な知識を持っている人がまだアラスカにいたことが、アラスカ考古学人類学の魅力なのである。

○平成5年度第1回講座

サハ（ヤクート）の口琴を聴こう

演奏者／国際口琴センター代表 イワン・アレクセイエフ氏 同理事 スピリドン・シシーギン氏
解説者／日本口琴協会 直川 礼緒氏

6月6日には、ロシアのサハ共和国（かつてのヤクート自治共和国）の首都ヤクーツクから来日したイワン・アレクセイエフ、スピリドン・シシーギンの両氏をお迎えして、サハの口琴「ホムス」を演奏していただきました。当日、天気がいよときは当博物館野外ステージでの開催予定でしたが、あいにく天候が悪く、ロビーで行いました。以下に演奏の合間に行われた、解説などを紹介します。なお、会場でのロシア語通訳は針生幸子さんをお願いしました。

サハと伝統楽器「ホムス」

サハは東シベリアのサハ共和国を中心に約30万人が生活し、トルコ語と同じ系統のことばを話す。以前はヤクートと呼ばれたが、現在は自称の「サハ」を用いている。伝統的生業として馬の遊牧をおこない、その文化は馬との関係が深い。また、サハの精神的な支えであり、民族を象徴するものが三つある。馬乳酒を入れる木製の杯「チョロン」、神聖な土地に立てる彫刻を施したトーテムポールのような柱「セルゲ」、そして今回演奏する口琴「ホムス」である。

30年ほど前、ホムスはいったん廃れかけたが、イワン・アレクセイエフ氏を中心とした人びとの熱意により見事に復興をとげた。現在では、サハの各村にホムス演奏のアンサンブルがあり、小学校のクラブ活動でも演奏が盛んに行われている。1991年にはヤクーツクで国際口琴大会が開催され、1992年の春には国際口琴センターが設立されるなど研究活動が活発に行われている。

ホムスの演奏技法

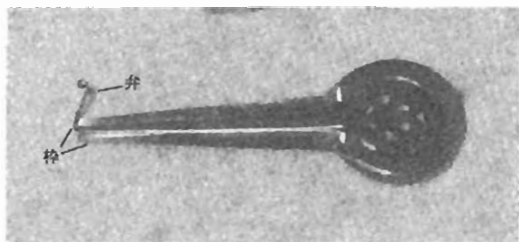
口琴は、特にユーラシア大陸全域とメラネシアに多くみられ、金属製のものと、竹や木などで作られたものがある。今回の演奏に使う「ホムス」は鉄製の口琴である。演奏方法は、楽器を口に当て、弁と杵から発せられる微かな音を、演奏者自身の口腔（うわあごと舌の間の空間）に共鳴させることで、さまざまな音を得られる。楽器そのものの基本音は変化しないが、口腔で倍音を強調するこ



とにより、メロディーの演奏ができる。

演奏者はホムスで、小川のせせらぎや氷が溶ける滴の音といった自然の音、馬の蹄の音や鳥のさえずりなどを模倣する。たとえば、舌を前後に動かしながら、口の大きさを変えることでヒバリ（ヒバリ）のさえずりを、舌を上下に動かし、うわあごにつけたリ離したりすることでガンの鳴き声を模倣する。また、声門を開閉することでカッコウの鳴き声を真似ることができる。さらに、弁を弾いたあとに唇でその振動を止めるスタッカート（スタッカート）の一種「タヴィグイル」という技法を用いて自然のさまざまな情景を表現する。

当日会場にいらして下さったアイヌの方々、弟子シギ子さん、磯鶴恵美子さん、今井ノリ子さんの3人によるムックリの演奏やホムスとの共演が、プログラムの途中で披露されました。また最後には、サハの夏祭りの際に、手をつないで輪になって踊る「オフオカイ」という踊りを、会場の参加者も一緒になって行いました。講座が終了したあとも演奏者のまわりには、本物の「ホムス」を近くで一目でも見ようと多くの参加者が詰め掛けていました。



ホムス（『口琴ジャーナル』№3 1991より）

○平成5年度第1回講習会 百年前のイヌイト文化について

講師／佐々木 亨（当館学芸員）

5月30日に開かれた講習会では、昨年、アメリカの博物館で調査をした講師が、その時に撮影したスライドなどで100年前のイヌイトの資料を紹介しながら、冬の「イエ」について考察しました。



まず、演題の「イヌイト」と「文化」の定義と使われ方について、シベリアからアラスカ、カナダ、グリーンランドまでの広い範囲に居住する「エスキモー」と呼ばれてきた民族を、当館ではその自称の一つである「イヌイト」で代表して表記していること、民族学で「文化」という場合、「生活様式全般」をさすことなどの説明がありました。次に本題の概要を紹介します。

当館の常設展示で復元したこともあり、北アラスカ沿岸の堅穴住居について、以前からいろいろと調べてきた。19世紀末から今世紀中頃までの民族誌によると、この地域ではクジラなどの海獣狩猟を主な生業の手段とし、夏には家族ごとに分散して狩猟を行い、冬は定住的な村に戻り、道具類の製作をしたり集会小屋で儀礼や芸能を行うという生活パターンを送っていた。およそ100年前に、J.マードックが行った調査では、居住空間に冷たい外気を入れないためのトンネルやツンドラの芝土で覆った屋根や壁など、保温性の良い堅穴住居の構造とそこで使われていた道具などについて報告されている。さらに、500年前の住居から発掘されたミイラの解剖の結果、7畳ほどの空間に成人女性と子ども6人ほどが暮しており、ランプの煤による炭肺症等、健康状態は良くなかったことなどが明らかになった。イヌイトにとって冬の住居は「住み心地が良い」とは決していえず「我慢して耐える」空間だったとも思われるが、冬は精神文化面にエネルギーを傾ける季節だったのかもしれない。

本セミナーは、北太平洋沿岸地域における先史文化の起源や歴史および拡散について、アメリカ、日本、ロシア、カナダの考古学研究者が最新の情報を交換し、さらに調査方法などについても意見交換することを目的とするもので、筆者も発表者として参加の機会を与えられました。アメリカからはアーカンソー大学のA.P.マッカートニー教授、アラスカ大学のW.B.ワークマン教授をはじめ13名、日本から岡田宏明北海道大学教授、岡田淳子北海道東海大学教授をはじめ9名、カナダから4名の発表者、また約10名の討論参加者が加わりました。

4つの総論的発表「北太平洋の古環境」（D.マン／アラスカ大博物館）、「北部日本における海洋適応」（岡田宏明）、「カナダ太平洋沿岸における海洋適応の研究史」（R.L.カールソン／サイモン・フレーザー大）、「アジアー北米の相互の影響」（W.フィッツュー／スミソニアン協会）とその他の研究者か

日米セミナー「北太平洋先史海洋文化の起源、発達および拡散」

6.3～8 於：ホノルル

ら各論的発表が行われ、活発な意見交換が行われました。北米側からはベーリング海峡地域からアリューシャン列島、アラスカ半島ーワシントン州に至る沿岸地域の先史海洋適応についての地域別発表が、また日本側から日本あるいは北海道などにおける先史海洋適応や極北文化の系譜、アイヌの交易及び海獣狩猟、頭骨形態小変異からみたアイヌのルーツ等の発表がありました。当初予定されていたロシアからの参加が取り止めになったことが残念でした。上記外の発表者は以下のとおりです。（敬称略）R.アッカーマン／ワシントン州立大、A.キャノン／マクマスター大、D.クラーク／カナダ国立文明博、G.コブランド／トロント大、D.デュモン／オレゴン大、P.ネヒト／ハーバード大、M.モス／オレゴン大、D.リーガー／アラスカ州、R.シヨ／アラスカ州、D.ヴェルトレー／アラスカ大、M.ヤーボロー／CRC、D.イエスナー／アラスカ大、百々幸雄／札幌医大、小谷眞宣／名古屋大、スチュアート ヘンリ／目白学園女子大、手塚薫／道南拓記念館、矢島国雄／明治大、山浦清／立教大（学芸課 渡部 裕）

Q

北西海岸インディアン
の衣装で、いろいろな文様
の織り込まれたマントの
ようなものに興味を持ち
ました。作り方やどんな
時に着る物なのか等教え
てください。

A 北西海岸インディアンは、字の
とおり、北アメリカの北西海岸に
住むインディアン諸族の総称です。
高緯度地域であるにもかかわらず、
アラスカ海流の影響で気候は比較
的温暖で、木製品が非常に発達し
ており、トーテムポールを建てる
ことでも知られています。また、他
の北方民族のように寒さを防ぐた
めの毛皮の衣服などはあまり必要
としませんでした。

ご質問の「マント」は、チルク
ット・ブランケットと呼ばれるも
ので、北西海岸インディアンのな
かでも最北に住むトリングットの一
集団チルクットからその名がつけ
られています。素材はシロイワヤ
ギの毛とシーダー（ヒノキの仲間）
樹皮の糸で、熟練した女性でも織
りあげるのに数か月は要するとい
います。ですから、首長など身分
の高い人が儀礼の際に着るものと
して、大切に扱われました。

ブランケットには、目、口、手足

などのモチーフが複雑に入り組み、
全体で一族の紋章や神話に登場す
る動物などを表しています。図案
は、それに詳しい男性が板の上に
描きました。

現在では、チルクット・ブランケ
ットを織れる人が少なくなっており、
大変貴重な資料といえます。

（学芸課 齋藤玲子）

'93.8～10の行事

・7/20～9/19

国際先住民年記念特別展

「北方諸民族と現代の民族芸術」

・8/1 第2回講習会

「北欧サミのひも作り」

講師 笹倉いる美（当館学芸員）

・8/29 第3回講習会

「ボーダーレス時代の北方地域研究」

講師 池谷和信氏（北海道大学）

・9/12 第2回講座

「アムール中下流域の

靴・靴・靴の文化」

講師 ニコライ N.クラディン氏

（ロシア科学アカデミー）

解説（通訳）天野哲也氏（北海道大学）

※変更する場合がありますので、ご確認ください。

前号でお知らせしていた第3回講
習会が8/29に変更になりました。

講座、講習会はいずれも午後2時

から当館講堂にて開催します。参
加は無料です。内容の詳細やお申
し込みについては、博物館まで電
話でお問い合わせください。

「研究紀要 第2号」刊行

「北海道立北方民族博物館研究紀
要第2号」が刊行されました。内容
は次のとおりです。

大林 太良

「アイヌの霊魂の観念」

スチュアート ヘンリ

「ネツリック・イヌイト社会にお
ける春の生業 -5～6月のカリー
ーと漁撈を中心に-」

風間伸次郎

「ナーナイ民俗語彙ノート（1）」

渡部 裕

「蝦夷地における動物名称の認識と
アイヌの生業-海獣類の事例から-」

青柳 文吉

「オホーツク文化のクマ意匠遺物」

佐々木 亨

「ミュージアム・マーケティング」
は博物館運営の救世主となるか。」

齋藤 玲子

「北方諸民族における現代の民族芸
術研究への課題-イヌイト・アー
トの商品化の歴史を中心に-」

笹倉いる美

「資料紹介サミのカレンダー」

国際先住民年記念特別展

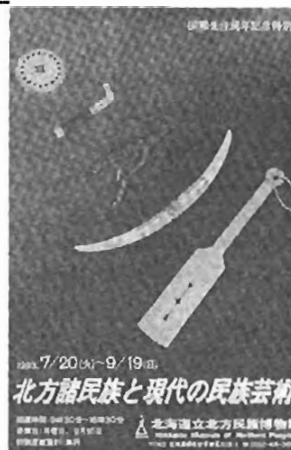
北方諸民族と現代の民族芸術

平成5年7月20日（火）～9月19日（日）／休館日 月曜日、9月16日

特別展観覧料は無料です

北方地域に住む諸民族のさまざまな生活用具には、洗練されたデザインや手の込
んだ装飾を施したものなどが多くあり、それぞれの民族に特徴的な美の基準や表現
方法を読み取ることができます。各民族の暮らす自然環境や世界観を反映した美
術工芸や音楽・芸能などの民族芸術は、民族としてのアイデンティティ（帰属意識）
を主張するものとして、形を変えながらも現代に継承されています。

本特別展では、国際先住民年にちなみ、現在作られている美術工芸品を中心に、
映像などもまじえ、北方民族の芸術の変遷と新しい取り組みについて紹介します。



寄贈資料紹介

○サハリン・アイヌに関する
図書等

平野勇助著『落帆土人斯什器と寶物』葛西猛千代・平野勇助共著『樺太土人研究資料』、アイヌ玉5点他が、網走市の加藤栄一氏から寄贈されました。

○チュクチの衣類等

チュクチの手袋、帽子、人形各1点とアリユートのワナ1点が、札幌市の大島稔氏から寄贈されました。

執筆者ならびに出版社から
贈呈をうけた書籍 (4月～6月)

伊藤公平『くんねっぶの文化財シリーズNo.12一統訓子府町の植物編(なおす・かざる・うたう)』訓子府町教育委員会 1993

岡田宏明他『環極北文化の比較研究』北海道大学文学部 1993

小谷凱宣他『在米アイヌ関係資料の民族学的研究』名古屋大学教養部 1993
平口哲夫『個体別分析による縄文時代イルカ捕獲活動の研究』金沢医科大学医学部 1993

主な来館者

4/2 E.ロフコフ氏(カムチャツカ州クロノツキー自然保護区研究官)

4/27 野村義一氏(北海道ウタリ協会理事長)

5/9 V.N.ワシリエビッチ氏(ボロナイスク市博物館長)他2名

5/23 張志良氏(中国総領事館領事)

6/13 新維柏氏(黒龍江省文物管理委員会副局長)劉曉東氏(黒龍江省博物館歴史部副主任館員)

6/18 J.オーウェン氏(ニュージーランド自然保護局)、A.アントニエッティ氏(スイス自然保護局)

観覧者動向 4月～6月

	常設展示	特別展示
4月	1,289名	98名
5月	5,533名	2,519名
6月	4,539名	108名

第6回特別展の総観覧者数は2,725名でした。

みんな

こうこ

はくぶつかん

in Hokkaido (4月～6月)

4/22 「フチの伝えるところー食生活から・春編」(ヤイ・ユーカラの森運営委員・計良智子さん筆) 5/3まで10回シリーズ/D

4/30 ユーカラの伝承者・静内の織田ステさん死去/D(夕)

5/8 由仁町にマンモスの館「ゆめつく館」オープン/Y

5/29 白老・アイヌ民族博物館で「アイヌと植物・樹木編」4年ぶり発刊/M

6/18 独創的な造形と豊かな表現力・開拓記念館でイヌイット・アート展/D(夕)

6/24 博物館網走監獄・開館10年目で入館300万人達成/AB他

6/30 人気高い気象情報 美幌町立博物館・農業館 パソコン通信 4年で加入250人に/Y

6/30 道立社会教育総合センターの生涯学習情報ネット開始・市町村の端末と直結/D(夕)

*AB網走新聞

D 北海道新聞(オホーツク版)

M 毎日新聞(道東北版)

Y 読売新聞(北網版)

複数紙掲載の場合は、扱いの大きい方を紹介しています。

その他の主な行事

6/12 小中学生のための博物館講座
(第2土曜日開講)「楽しい拓本教室」

◇職員の異動◇

転出(4月1日付)

副館長 澤田 尚

(北海道教育庁文化課参事へ)

管理課主査 佐伯 忠男

(北海道教育庁給与課主査へ)

転入(4月1日付)

副館長 青野 昌勝

(北海道教育庁胆振教育局次長から)

管理課主査 牧野 義則

(北海道教育庁釧路教育局社会教育係長から)

退職(6月30日付)

解説員 吉田 美穂(旧姓 堀口)

採用(7月1日付)

解説員 堂上 恵美

編集後記

『主な来館者』でご紹介しているのは、紙面の都合もあり、ほんの一部に過ぎない。広く北方地域を対象としているため、いろいろな方の紹介で海外の研究者が訪ねてくださる。

北海道と姉妹州である中国・黒龍江省からは、今までにも何人かの研究者にお越しいただいたが、資料のことなど専門的な内容に及ぶと、通訳者を介さずに筆談。サミのシャマンの太鼓の使い方については「占」「…?」いや「ト」かな「!」。

最近の新聞で、「学芸員は語学力をつける必要がある」という論説を読み、改めて耳が痛いのだが、とりあえず漢字だけでは救われたか。(斎藤)